

ザビエルと種子島

ディエゴ・パチェコ著
門田 明 訳

故ゲオルグ・シュールハンメル (Georg Schurhammer) をはじめとする権威ある著述家が、日本にヨーロッパの火縄銃が伝えられたことで知られる島、種子島に、聖フランシスコ・ザビエルが一度も訪れたことはない、明確に否定しているのであるから、あらためてこの問題をここに提起するのは、多分いささか不遜なことに思えるかも知れない。¹にもかかわらず、これらの著者によって提示された論考を慎重に検討・熟慮の結果、著者は現在なお肯定的立場をとりたいと考える。

最も重要な関連史料は、疑いもなく、1554年ゴア発信のペドロ・デ・アルカソヴァ (Pedro de Alcaçova) 修道士によって書かれた手紙である。不幸なことに、この手紙の原文は残っていない。そこで、われわれは、1598年エヴォラ (Evora) で出版されたイエズス会書簡集に見出される翻刻に寄らざるを得ない。

「われわれが日本で最初に到着した地方は、種子島 (Tanuxuma) と呼ばれる島で、フランシスコ尊師 (Father Master Francisco) がすでに訪れた所である。この地の領主はわれわれを大いに歓迎してくれた。われわれは、そこに8日間滞在し、この逗留の間ずっと、われわれは島民によって非常に親切な扱いを受けた。」²

1552年8月14日、「タネガシマ」(Tanuxuma) に到着した宣教師たちは、バルタザル・ガゴ神父 (Father Baltasar Gago) とドゥアルテ・ダ・シルヴァ (Duarte da Silva)、ペドロ・デ・アルカソヴァの両修道士であった。彼らが到着のさい乗っていた船はザビエルの親友であるドゥアルテ・ダ・ガマ (Duarte da Gama) の持ち船であった。一行は豊後へ行く途中であり、宣教師たちが最後にガマの船を降りるのは、この豊後であった。アルカソヴァの手紙がザビエルに言及していなければ、この三人の宣教師たちが種子島に立ち寄った事実、些かの疑念も差し挟まれないだろう。しかし、いずれの意見を採用するにせよ、幾つかの興味のある結論に達するのである。もしアルカソヴァの手紙に、誤りも恣意的な書き込みもないのであれば、その場合われわれはザビエルが種子島を訪れたことを認めなければならない。もし逆に彼の手紙が誤っているのであれば、ダ・ガマの船は

種子島ではなく鹿児島に行ったのであり、その場合われわれは、薩摩の大名・島津貴久が、すでに自国領にキリスト教を禁止しておきながら、その後もう一度宣教師たちを歓迎したという奇妙な事実を説明しなければならない。³

ルイス・フロイス (Luis Frois) はその『日本史』(História) の中で、疑問も修正も加えずアルカソヴァの手紙を引用している。⁴ フロイスは日本の教会の最初の数年の歴史に精通していた。しかし、フロイスの時代においてさえ、ザビエルが日本にむかう自分の航海について書いていることと、アルカソヴァの手紙の間に矛盾があると考えた著述家たちがいた。ザビエルは「そして日本の他のどの港にも立ち寄ることができず、わたしたちはガゴシマ (Cangoxima) に来ました。ここはパウロ・デ・サンタ・フェ (Paulo de Santa Fe) の生国です。」⁵ と書いている。アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano) は、アルカソヴァを支持する立場にたって議論に参加している。彼はザビエルの手紙のテキストは誤写されたのだと信じている。⁶ 一方ザビエル研究の優れた専門家であるシュールハンメルは、ザビエル書簡の編集にさいしてこの見解を否定し、近年出版された伝記でも従来同様の意見を堅持している。⁷

ヴァリニャーノとシュールハンメルの見解をまとめると、それぞれ次のようになる。

ヴァリニャーノの見解：

アルカソヴァが述べているようにザビエルは種子島に上陸した。

この種子島訪問は、かれの日本に向かう航海の途中おこった。

したがって、ザビエル書簡のテキストに誤りがある。

シュールハンメルの見解：

ザビエル書簡のテキストはこの点では全く疑問の余地がない。

そこでアルカソヴァの矛盾する記述は誤りである。

シュールハンメルの意見に基づいて、最近の書物の著者はすべてアルカソヴァを否定する見解を表明している。⁸ ただし岡本良知氏は、鹿児島・種子島の二つの地名を取り違えたと推定することは困難だと指摘している。アルカソヴァははっきりと、「タネガシマ」(Tanuxuma) は「島」(hua isla) である、と書き留めているからである。

筆者自身は、ザビエルの種子島訪問は、日本からインドにむかう帰り道の航海途上に起こったことだ、という単純な可能性に、これまで誰も目を向けなかったため、この問題が生じたのだと確信している。初期の著述のなかで、シュールハンメルは、府内⁹ の港・沖の濱から出港したザビエルの帰路を、関門海峡経由のものと想定している。最近の伝記では、ポルトガル諸船の航路を再現する学術成果を援用している。すなわち、日向・大隅沿岸ぞいに設定している。¹⁰ しかし、同時に、おそらく先に彼が採用した立場によるものと思うが、ザビエルの船が種子島に立ち寄ることなく、大隅と種子島の間を通過したこと

している。しかし後になって、アルカソヴァの航海を取り扱った際、1552年8月、ダ・ガマが種子島に短期滞在したことを認めており、このことは注目に値する。もし、この高名な歴史家が、その伝記の最終巻の校正で、訂正の機会を与えられていたとすれば、ザビエルがその帰り道の航海で種子島にも立ち寄ったという明白な結論に達していたかも知れないと、誰しも思い巡らすであろう。

アルカソヴァのテキストをもう少し詳細に検討してみよう。まず第一に、“Tanuxuma”という表記は、アルカソヴァが種子島という名称を自己流に転写したものではなく、単にその時代のポルトガル製諸地図にある、当時の表記法であるにすぎない。これは、同じ諸地図が鹿児島を「Caguxuma」と表わすのと全く同じである。¹¹ “Tanuxuma”は「タネシマ」からの極めて単純な派生による。更に、アルカソヴァのテキストは、同じ書簡の他の箇所と比較するとき、さらに容易に理解しうるものになる。

フランシスコ尊師が最初に逗留したカゴシマ (Cangoxima) には、教導者が一人もいないにもかかわらず、相当数のキリスト教徒がいる。働き手の不足が全王国のキリスト教化を妨げている。¹²

二つのテキストは補完的關係にある。文脈から考えるに、アルカソヴァは、明白に、二つの異なった土地と、二つの異なった航海について語っている。アルカソヴァは、日本でザビエルが最初に訪れた土地が鹿児島であったということに合意している。また、アルカソヴァが“Tanuxuma”の島の領主を、大名とせず、「トノ (tono)」（殿）と定義付けているように見えることも付記してよいだろう。

しかし、仮に内在的証拠からアルカソヴァの手紙の写本に誤りがあるということを示すことが不可能な場合でも、その政治環境と地理的位置を多少研究すれば、ダ・ガマの船が1552年に、鹿児島に立ち寄ったとすることが、極めて起こりそうもないことであったと、はっきり理解しうる。というのは、薩摩と豊後とは仇敵の間柄であり、豊後むけの積み荷を積んだ船が、単に島津貴久に挨拶を述べるだけの目的で、鹿児島に立ち寄るなど極めて異常なことであったろう。特に、この大名が外国貿易を大いに切望していたという事情を考えると、それは起こりえないことである。南西諸島から豊後に向かう船舶が、途中一時寄港する場合、自然な寄港地は、鹿児島ではなく種子島であろう。鹿児島に立ち寄れば、事実、相当な回り道になるのである。

最後に、ザビエルが種子島に一時滞在した日付を確定し、また、アルカソヴァの情報の出所を明らかにする、精しく知られた事実がある。1551年のインドに向かうザビエルの航海と、1552年の豊後に向かうアルカソヴァの航海と、この二つの航海の船長は、いずれも同じドゥアルテ・ダ・ガマである。もし、同じ船長が二年続けて豊後への海路を航行すれば、彼が同じ港々に寄港するのが自然なことである。そうでなければ、ザビエルと日本ま

で同行しながら、当時まだこの国に居残っていた宣教師たちが知っていないこと、（つまり、ザビエルがインドへの帰路種子島に立ち寄ったこと）を、この船長がアルカソヴァに知らせるなど、ありそうもないことである。その船が入港した種子島の港は、その島の領主についての記述からはっきり推論できる。つまり西之表であって、それが種子島時堯の居城の地であった。¹³

疑問点の全体は次のように、整理できる。

アルカソヴァの書簡のテキストも、ザビエルの書簡のテキストも、ともに正しい。

アルカソヴァとその同伴者たちは、1552年、鹿児島ではなく種子島に立ち寄った。

ザビエルもまた、種子島を訪れた。しかし、それは1551年11月の終わりに近い時期で、彼がインドに帰る航海の途中であった。

そして、論を閉じるにあたり、われわれは、一年後に到着した宣教師たちと同様、ザビエルもまた、種子島がその訪問客に提供する伝統的な厚遇を満喫したと、想像することができるであろう。

注

1. 1543年の種子島への最初のポルトガル人の到着と、彼らが日本に鉄砲を伝えたことについては、ゲオルグ・シュールハンメル・S・Jによって、'O Descobrimento do Japao pelos Portugueses no ano de 1543' ("Orientalia" Rome, 1963, pp. 485~579) で、余すところなく研究されている。
2. Cartas que os Padres e Irmaos da Companhia de Iesus escreverão dos Reynos de Iapão e China……, Evora 1598, I, f. 23.
3. 島津貴久 (1514-71) 島津家15代の大名。1549年9月29日、彼はザビエルを友好的に接見している。しかし翌年、領民がキリスト教に改宗することを、死罪をもって禁じた。
4. Luis Frois, S. J., Die Geschichte Japans, Georg Schurhammer, S. J., & E. A. Voretzsch, ed., Leipzig, 1926, p. 29. この部分に注をほどこすに際して、シュール・ハンメルは始めて、アルカソヴァを否定する彼の立場を表明している。
5. Georg Schurhammer, S. J., & Joseph Wicki, S. J., ed., Epistolae S. Francisci Xaverii, Rome, 1945, II, p. 185. この手紙は1549年11月5日、鹿児島発信の日付である。
6. Alessandro Valignano, S. J., Libro Primero del Principio y Progreso de la Religion christiana en Japon'. 1601. 大英博物館所蔵未公刊文書 (Additional MSS 9857, f. 42 v.)
7. Georg Schurhammer, S. J., Franz Xaver, sein Leben und seine Zeit, Zweiter Band, Asien (1541-1552), Dritter Teilband, Japan und China, 1549-1552, Freiburg.

1973, p. 53, n. 171.

8. 例えば、村上直次郎『耶蘇会士日本通信豊後編』(1936, I, p. 68), 岡本良知『16世紀日欧交通史の研究』(1944, pp. 330 ff.), Johannes Laures, S. J. 「鹿児島のカリシタン」(『史学』XXVI, 1952, p. 53), 柳谷武夫『ルイス・フロイス 日本史』(1963, I, pp. 291-2), 青山玄「ザビエル滞在期の鹿児島」(『カリシタン研究』XIII, 1970, pp. 78, 89, n. 70)
9. 府内は現在の太田市
10. ザビエルの船がたどった航路を明白に示すような文書が存在するようには見えないが、このような情報は必要性が乏しい。帰りの航海にザビエルと同行したフェルナン・メンデス・ピント (Fernão Mendes Pinto) は、「ミナコ」(Minaco) の港について述べている。これは恐らく「ミナト (港)」のことと思われるが、初期のポルトガル地図には九州南東にこの名を見ることができる。(岡本 pp. 335-6, n. 2)
11. Schurhammer, Franz Xaver 126頁掲載の地図による。
12. Cartas, I, f. 27 v.
13. 種子島時堯は14代領主 (tono) であり、1543年にもポルトガル人を受け入れたことがあった。彼の子孫はいまも種子島に在住している。

訳者あとがき

ここに紹介した「ザビエルと種子島」は、' Monumenta Nipponica ' 1974年・冬季号 (Volume XXIX, Number 4, Sophia University) 掲載の英語論文 Diego Pacheco "Xavier and Tanegashima" を訳出したものである。

著者のディエゴ・パチェコ氏は、1922年スペインのセビリヤ生まれ、1948年来日のイエズス会司祭である。現在、長崎の日本二十六聖人記念館長であり、またカリシタン史の研究者として著名である。著書に『長崎への道』『鈴田の囚人』『長崎を開いた人』などがあり、1975年春苑堂書店発行の『鹿児島のカリシタン』は、鹿児島カリシタン史の全体像を始めて明らかにしたものであった。その後、日本国籍を取得、日本名を結城了悟という。

さて、フランシスコ・ザビエルは、1549年8月15日、鹿児島に上陸し、9月29日、領主島津貴久に会い布教の許可を得、ここに始めて日本にキリスト教が紹介されることになった。その後ザビエルは、約一年間鹿児島に滞在したが、50年8月末平戸にむかい、十月末京都にむけてそこを立ち、山口・堺を経て51年戦乱で荒廃したミヤコ京都に着いた。天皇から日本宣教の許可を受けたいと望んだが謁見も許されず、11日間の滞在で何の成果を挙げることもなく、再び堺に下り、船で3月中旬平戸に戻った。4月末威儀をただし総督・司教の信任状と進物をたずさえて再度山口におもむき、領主の保護を得て布教に努めた。9月中旬豊後領主大友義鎮の招きを受け府内に行くが、期待していたマラッカからの連絡

がなく、不在中のゴアの状況が気懸かりで、11月15日豊後・沖の浜を出帆、ひとまず、サンチャン（上川）島を経てマラッカに帰っている。

このザビエルの日本往還の足跡について、大筋の点で研究者の見解は一致している。しかし、細部については諸家によって異論も多い。例えば、ザビエルを日本に案内した鹿児島青年はアンジロウともヤジロウとも呼ばれている。また、その出自・生涯については、それぞれ、それなりの根拠を示す数説が並存する。ザビエル・島津貴久対面の地については、伊集院説と国分説とがあり、またザビエルが鹿児島を離れた港は、鹿児島とも京泊とも言われている。

これら、諸説輩出の理由は、400余年という時間の経過はともかくとして、主としてヨーロッパに存在する根本史料に十分な記載がない上、キリシタン禁制のため日本側の対向史料が皆無であり、推論によって埋める部分が多いことによる。しかし、ここに訳出した論文の主題である、ザビエルの種子島訪問の問題は、やや趣きを異にしている。すなわち、最終典拠とされる書簡翻刻本に種子島訪問が明記されながら、他の一級史料ザビエル書簡の記載と矛盾するとして、これまで鹿児島と種子島が混同誤記されたと理解され、ザビエルの種子島訪問の事実が否定されてきたのである。

本論文の著者パチェコ氏は諸説を渉猟検討の上、原史料に立ち戻り、二つの書簡の記載に矛盾のないことを、極めて明快に立証している。

否定説の最有力な主張者であり、その後の論者に多大の影響を与えたシュールハンメルはすでに他界し、彼自身による反論あるいは訂正は期待できないが、この碩学の大著『フランシスコ・ザビエル伝』英語版の該当箇所には、翻訳者によるノートが付記され、パチェコ論文の要旨が紹介され、研究者の判断を促している。(cf. Georg Schurhammer, S. J. "Francis Xavier—His Life, His Times" Volume IV, Japan and China 1549—1552, Translated by M. Joseph Costelloe, S. J., 1982, The Jesuit Historical Institute, p. 50, note)

鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』に、この論文の翻訳を紹介する必要を感じたのは、最近日本で出版された最も浩瀚なザビエル伝である、河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』（平凡社・1988）がこの問題に触れず、日本渡航図（p. 230）の帰路を、豊後・日向・大隅・種子島のコースで図示しながら、種子島への寄港は示さず、従来の諸説を未解決のまま放置したかに思えたからである。同時に、訳者は、（当然パチェコ説を支持するものであるが）、鹿児島のキリシタン史に関心を持つ者として、カタリナ豎野永俊流謫の地・種子島に、ザビエルやその他の宣教師たちが足跡を残していたことは、ある予兆的意味を持つ重要な出来事であったとも考える。鹿児島の地方史研究家の間で、今後この問題が活発に論議されることを期待したい。

最後に、Xavierの日本文字による表記法についてであるが、シャヴィエル（『日本キリ

スト教歴史辞典』『洋学史辞典』) ハビエル (『キリスト教人名辞典』) など, さまざまな表記の中から「ザビエル」としたのは, ザビエル教会・ザビエル公園など, 一般の地名として使用され, 最近の書物・新聞がほとんど例外なくザビエルを用い, この表現が日本語の固有名詞表記法として動かしがたく定着していると判断するからである。念のため付記しておきたい。

(1993年1月18日受理)